わたしの野村胡堂・あらえびす

藤倉四郎

MBC

藤倉四郎(ふじくら　しろう)

東京八丁堀生まれ。明治大学兵役のため中退。
著書に、野村胡堂夫妻に捧げた「白鳥の子」のほか、「憩いの丘」「光が丘の子供たち」「主の教えてくださったお祈り」「くるみの木の下に」
訳書　アウグスティヌス「幸福は地上のものではない」リションム「美しき聖母の生涯」など。

わたしの野村胡堂・あらえびす

平成2年9月28日　初版発行

著　者　藤　倉　四　郎
発行者　渡　邊　幸　子
発行所　エム・ビー・シー21
東京都千代田区富士見2－6－10
電　話　03(237)7170
発売所　㈱東京経済
印刷所　須藤印刷㈱

© 1990 SHIROU FUJIKURA Printed in Japan 定価1,350円(本体1,311円)
落丁・乱丁は本社でお取替えいたします。

わたしの野村胡堂・あらえびす

藤倉四郎

MBC 21

野村胡堂・ハナ
昭和16年6月24日　　京都・瓢亭　　昼食前

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

わたしの野村胡堂・あらえびす　目次

わたしの野村胡堂・あらえびす／11
忘却　清算／13
カタクリのむれさくころの／18
珍しく　珍しく／26
一高そして帝大／33
山吹ありき／43
父の翻意／51
結婚式はもりそば一杯／56
燃え上がる没頭蒐集癖／61
レコード　レコード　レコード／68
音の記録／76
ユモレスク／84
奮いたつハナ／88
日　常／94
バッハからシューベルト／98
救世主の思い出／108
K子と野薔薇／117
「ザ・グラモフィル」そして「ディスク」／123

ライフワーク　銭形平次／129
平次盗難／140
平次のかくし子／143
平次役　お静役　八五郎役／149
広　重／156
疎　開／161
田部井健次／165
一彦のために／172
オレンジをつくろう／174
帰　京／175
葉っぱの上にお芋／179
もうひとりの賛美者　神谷美恵子／182
ソニー誕生／186
メニューインがきた　カザルスがきた／188
金田一京助／197
石川啄木／205
野村光一／213
ロクサーヌどのまいる　辰野　隆／215

ねえ陛下　サトー　ハチロー／219
将棋名人　木村義雄／222
五人の大将／226
秘書ハナ／232
許　す／239
野村学芸財団／243
プリンセス　ミチコ／245
黄　昏／260
ごほうび／264
あとがき／271
参考文献／272

わたしの野村胡堂・あらえびす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

わたしの野村胡堂・あらえびす

「親分、大変ッ」

日本一の浅黄空、江戸の町々はようやく活気づいて、晴れがましい初日の光の中に動きだしたとき、八五郎はあわてふためいて、明神下の平次の家へ飛び込んできたのです。

お馴染み銭形平次のプロローグである。

いかなる芸術でも、その最後の値打を決定するためには、創作者、演奏者の人格にまでもどらなければならない、不良少年型のいわゆる天才は、一時ジャーナリズムの波に乗って、天下の人気を背負って立つことがあろうとも、それは全く稲妻のようにはかない一閃光で、永遠に人の心を高め得るものではない。

今世紀随一のヴァイオリニスト、フリッツ・クライスラーを説くために、こう書きださずにいられなかった、野村あらえびすの心意気である。

胡堂とあらえびす。

一見あまりにも背反したように見えるこの二つのペンネームを駆使して、野村長一は、大衆文壇に、クラシックレコード界に雄飛した。

そればかりではない。

業ともいえる没頭蒐集癖で、一新聞記者でありながら、二万枚のＳＰレコードを蒐集した。森鷗外の蒐集と比肩されるほどの武鑑をそろえ、その他にも、安藤広重の風景画、陶磁、書、江戸期の文書などを蒐集した。

この厖大な蒐集は、際限もない財力があってのことではない。それどころか、マイナスからの出発だった。

その間、有力なパトロンがついたわけでもない。橋本ハナという女性とリヤカーに収まるくらいの新世帯で出発しながら、築きあげていったのである。

わたしは、あらえびすの著作に打たれて、門を叩いた。そして、師事していくのは、やがて胡堂でもなく、あらえびすでもなく、野村長一・ハナ夫妻へと傾斜していった。わたしへの恩師の手紙は、百通を超えるだろう。

わたしを通して見た野村胡堂・あらえびすの人間像を書きつづってみたい。

忘却　清算

重たそうな柳行李をさげた青年が上野駅の雑踏のなかにいた。

野村長一、のむら　おさかずと読む。タミエ　キミ　耕次郎　章の弟妹がいる長男である。数えで二十歳、進学のため上京。宿は本郷。明治三十五年、春。

なんの変哲もない、ごく平凡な上京姿である。

ところが、長一にとっては、故郷を捨てるような思いで汽車に乗った。

東北本線、上野から数えて、盛岡の五つ手前、日詰駅に立ったとき、もうここには帰ってこられないのではないか、とさえ思った。

実際、ふるさとの彦部村は、ひっくりかえるようなさわぎになった。

明日にでも祝言をあげようという、れっきとした嫁がきまっているというのに、嫁は自分でみつけた、それも、おなじ村の娘だと！

彦部村。いまは紫波町になっているが、閑寂そのものの田園風景がひろがる。稲の穂をなでていく風と、カラスと、雀の声だけが耳にはいってくる。

そんな農村の住民たちが、息をのみ、顔を寄せ合うような気配になった。

あの温厚そのものの村長も頭が痛いだろう、村人たちは、村長の跡取り息子のひきおこしたさわぎに困惑した。どういう態度をとったらいいか、とまどってしまう。

村長の跡取り息子は、変り者でとおっていた。

中学（旧制）の制服をきているのだが、袖は七分ぐらいしかない。本人も気になると見えて、腕にスミをぬっている。ズボンの尻は、かんじよりでしばってあるものの、ときどき、肉体がはみ出してしまう。

髪は、ぼさぼさで、犬がびっくりして尻尾をまいて逃げた。寄宿先に寄った父が、きもをつぶして理髪店へひっぱっていくと、そこの主人がへたへたっとすわりこんだ、というから、そうとうなものだったろう。

父が首をひねるのも、無理はない。こづかいは、たっぷりとはいわないものの、きちんと与えてある。あのかっこうはなんとしたことだ。

長一は、大半を書店につぎこんでいた。

村から町へ出た。それだけでも、当時としては大変なことだった。そのうえ、入った盛岡中学は、県下の秀才がひしめきあっていた。貪欲な知識の吸収欲が、巨大な渦をまいていた。血がおどらないわけはない。長一は、すっかりのめりこんでいた。当然、身の回りなど、かまってる余裕はない。制服のつくろいなどは、家に持って帰れば母がしてくれるだろうに。

ところが、長一は、彦部村の実家へは帰りたくない。父も母も弟妹も、いつくしみ、慕ってくれている。庄屋の息子として、いうことのない身分である。

だが、長一にとって、どうにもがまんしきれないことが、ひとつある。
親同士のきめた許婚が、もう、実家にきてしまっているのだ。
そのころは、本人の意志などは無視して、婚約がきめられていた。というよりは、当人たちが、まだ幼いうちに、縁組まれていた。
その許婚は、父がほめるとおり、いたって善良だった。しかし、向上心がない。この女性と一生暮らそうとは思いもよらない。身震いがする。
たまに、実家の敷居をまたぐと、「式はいつにしようかな」などと、返答を求められる。
まわりの大人たちにすれば、なんのことはない茶飲み話のさかななのだ。
きまじめな少年にしてみれば、心の凍るおもいがした。
ひきとめられるのもきかず、下宿に逃げ帰った。ふとんを頭からかぶって、ぶるぶるっとやった。どうして、あの許婚と結婚なんかできるだろう。
その気になりさえすれば、歩いてでも行ける実家へ、足がむかなくなった。
ながい夏の休みも、秋田へ吟遊行をしたりした。投稿していた句誌の同人をたよっての旅だった。出迎えた同人の町の名士たちは、自分の眼を疑った。もっともらしい紳士が降り立つとばかり思いこんでいたものだから、ばんからな中学生から、「野村です」と言われたときは、目を見開いてしまった。
そんなにまで思いつめたのは、理由があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.